

書 評

清宮倫子（せいみや みちこ）著
『ダーウィンに挑んだ文学者
——サミュエル・バトラーの生涯と作品』
（南雲堂、2010年）

荻野昌利

ヴィクトリア朝文化研究の中でサミュエル・バトラー (Samuel Butler) は、最も研究の対象たるにふさわしい魅力と同時に、最も扱いにくい作家の一人である。その理由は、このヴィクトリア朝という激しく思想的変貌をする時代の潮流の中で、つねに伝統的なキリスト教文化と最新鋭の進化論という科学知識を議論の俎上に載せ、その動向をつぶさに観察し、それと同時にその角逐する相貌の逐一を、自らがその相克の一コマとなって終生追い続けた稀有な人物だったからである。彼を研究するということは、ある意味で、この時代の思想文化を鳥瞰図的に眺望することのできる知見の所有者であることを要求される。それが今日まで日本におけるバトラー研究の未発達の原因であった。残念ながら今回の清宮さんの著書の出版まで、日本の学会や出版界において、まとまった形でのバトラー研究が世に問われた事例はない。かく言う私も長年その野心を抱きつつ、挫折をした一人だった。その点で、本書は一人バトラーだけでなく、ヴィクトリア朝研究史における画期的な意義を有するものであることは間違いない。

本書は、著者の「あとがき」に「この書をダーウィン進化論の文学への影響の研究第二弾として上梓する。すなわち、『進化論の文学 —— ハーディとダーウィン』の続編と位置付けている」（196頁）とあるように、ダーウィンとヴィクトリア朝文学者との出会い・対決・超克の歴史を扱ったシリーズの一環である。そして『英語青年』（2007年6月号）で『進化論の文学』の書評を担当した私が、今回の書評をふたたび担当することになったのは（著者自

身にははなはだ不本意なことであろうが) けっして偶然とは言えない。二作はダーウィンを基軸にして、一つの連続性を有するテーマだからである。そのときの書評で、私は「おそらくこうした文化史的展望に立った進化論研究は、これまで日本ではなかったであろう。これだけでも、今後のダーウィニズムの文化史的研究に資すること間違いない貴重な業績である」(上掲『英語青年』177頁)と、私としては最大級の賛辞を奉ったはずである。そして今回も清宮さんの献身的な研究努力に敬意と賛辞を呈する気持ちにはまったく変わりはない。著者のはち切れるような気概が至るところからあふれ出ている。

バトラーはダーウィンの進化論の生成・発展の過程に若いころから注目をし、その成立に大いに期待をしていた。ところが、ふとした言葉のやりとりが誤解を生み、ダーウィンはこれがもとでバトラーから執拗な抗議を受け、その收拾に大変困惑したことは、Nora Barlow 編の *The Autobiography of Charles Darwin* (1958) の“Appendix”や Basil Willey の講演録 *Darwin and Butler: Two Versions of Evolution* (1960) などに詳しく語られ、今日ではダーウィンにまつわる一エピソードとして、専門家の間ではよく知られている事実であるが、実はこの話題はどうしてもダーウィンを中心にしたものに偏りがちであって、バトラーのダーウィンや進化論にかけたアンビバレントな思いがどうしても十分に伝え切れていないきらいがあった。

清宮さんの今回の著作は、前作の『進化論の文学』と多少趣を異にし、視点をバトラー側に移して、「序論」に始まって、第一章「チャールズ・ダーウィンとの対峙」、第二章「サミュエル・バトラーの反骨精神」と、いずれも彼のダーウィン観を中心に据えて、彼の思想的変化の過程を1850～60年代当時の進化論の全体的趨勢と合わせて語ろうとするところに新しさがある。特に「第一章、二「階層のエートスの乖離」は本書中の特に注目に値する一項である。ダーウィンとバトラーが同じジェントリー階級の出身でありながら、方やウェッジウッド閥閥からの支援を受ける裕福な環境に恵まれ、さらに『種の起源』(1859) 発表以後は科学界からも手厚い支持を受けて、悠々たる研究生活を享受できるものがいて、その一方で同じジェントリー階級の中では最低の聖職者階層に帰属している貧しい家系の出身者がいる。この階層的差別観、疎外感——「乖離」——の意識が、のちにダーウィンだけでなく、彼によって象徴される自然選択説進化論の流れへの、バトラー独特の「反骨精神」

となって顕在化し、彼の目的論的進化思想の形成につながったとする著者の主張には首肯すべき点が多い。同じ中流上の階級に帰属しながら、経済的・地位的格差が階級内部に大きな意識的ギャップを生み、それがやがて大きな思想的反目を生じる原因となった事例は、この当時の論争などに数多く見られたことだからである。

しかしバトラーがこの時代にあつて特に存在理由を發揮する最大の理由は、彼の「ダーウィンへの挑戦」が、単なるディレタント科学者の権威への挑戦ではなくて、一人のヒューマニストによるヒューマニズムからの科学だけでなく宗教的専制に対する挑戦であるという点にある。当時は権威に対する激しい闘争の繰り返された時代だった。キリスト教的権威が激しく揺さぶられた。地上における権威の象徴として父親に対する抵抗も勢いを増しつつあつた。そしてバトラーの遠大なる理想は、この宗教・科学の権威を超克して彼なりの目的論的世界観を確立することにあつたように思われる。それが彼の論説 *The Fair Haven* (1873) や *Life and Habit* (1877) などにはっきりと表されている。その点の清宮さんの指摘は要点を突いているように思われる。バトラーはこの時期、とりわけこの問題に深刻に煩悶したようで、彼の代表作 *Erewhon* (1872) や *The Way of All Flesh* (1903、ただし執筆されたのは1870年代から80年代初頭にかけて) と、彼の最も豊穡な生産時期と合致しているのは、けっして偶然ではないだろう。

ただ本書のひとつ難点を挙げれば（『進化論の文学』の書評のときも似たようなことを指摘した記憶があるが）、具体的な考証に進むにつれて、論点が整理されないまま、論旨が曖昧になる点である。例えば第四章「教養小説『肉なるものの道』」で、清宮さんは「一体どのような進化論のどのような視点が、この教養小説を独創的なものに変えるのに役立っているのだろうか？」あるいは「進化論の呼び醒ました倫理・宗教問題が主人公であるアーネストの体験と成長にどのように関係しているかを探求する」（106頁）と起論しているが、本章ではこの二つの論点が統一された『肉なるものの道』の作品論として結実するまでに至っていないように、私には思えるのである。その原因の一つは、清宮さんのキリスト教に関しての知識が——著者の掲げる進化論と倫理・宗教との関連性探究のテーゼにもかかわらず——進化論のそれに比べて多少見劣りがする点であろう。バトラー研究にはこの二つの知識がバラ

スを取って、あい拮抗していることが前提である。(この点が私が挫折した最大の理由だった。) そもそも『肉なるものの道』という本書の訳題からして問題である。*The Way of All Flesh*という原題は(多分著者自身熟知していることだろうが)旧約聖書の「ヨシュア記」や「列王記 I」の「すべて生きるものの道」、「万人の道」という言葉に由来するものであり、この聖書へのアリュージョンが、この小説のテーマと響き合っただけで皮肉な含蓄を生じせしめることになる。また主人公の姓“Pontifex”はラテン語で「(神々へ)進む道」「祭司長」を意味している。作者がPontifexの国教会聖職者の家系図にこだわったのも、その理由である。既成の「万人の道」的宗教的秩序への反逆である。これとヴィクトリア朝のクリシェのひとつ“earnest”と、主人公の名前“Ernest”、さらにそれに物語の逆説的展開とかぶせて考えれば、この小説の意図が宗教・科学を問わず、既成の概念の包括的破壊を目的とした反宗教的・反科学的なものであることが、自ずと明らかになるであろう。つまり作者の小説の発想の原点は、従来の科学・宗教観すべてをばらばらに解体——「脱構築」——して、そこからなにか新しい価値観を創出しようと試みることにあったのではないだろうか。そのためにバトラーの読者には、この複雑微妙に入り組んだ作者の精神構造を読み解こうとする、読者なりの作品の「脱構築」作業が要求されるのである。またそれと同時に、当然ながら、読者の科学・宗教両面へのバランスの取れた知識が必要とされるのである。彼の小説が果して一般的な「教養小説」の概念に符合するものかどうか、この作業の結果を見ることで明らかになるであろう。

結果的に『肉なるものの道』の主人公の足跡をたどれば明白なように、この作者の意図はおよそ成功からほど遠いものだった。彼が『ノートブックス』に綿々と書き連ねたアフォリズムは、彼がそれを自覚して、改めて新たな「フィクションの家」の建築に挑むための素材だったのである。そのすべてが最終的に不毛に終わってしまった。なぜそれが不毛と帰したのか。私にはその原因を究明することにバトラー文学の謎解きの鍵が隠されているのである。そして著者雨宮さんに問われていたのは、こうした個々の作品の内包している反社会的構造をすべて解体し尽くして、作者が究極的に求めようとした目的論的世界観とは真実いかなるものであったかを、改めて構築し直して、その全容を明らかにする試みではなかったか。残念ながら「第五

章 アフォリズム『ノートブックス』と「結び 自然科学と文学とバトラー」はその点が未咀嚼のままに、結論を急ぎ過ぎたきらいがあるような気がしてならない。著者のバトラーにかけて情熱をもってすれば、もう少し時間をかけその問題のさらなる解明を図ることは十分可能だったはずである。同様なことは「付論 芥川龍之介へのバトラーの影響」についても言えるだろう。これは比較文学的に実に興味深いテーマである。しかし考証的に十分意が尽くされているとは言い難いものである。